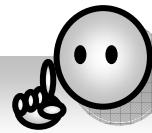


授業を設計する



内容説明

授業を設計する

わが国での学校教育では、内容が国によって決められており、授業設計といえば指導するための授業案を作成するというのが普通でした。その根拠となる学習指導要領があり、教科書があるので、それを教えることが重視されてきたのです。学校、施設設備、学年制、教科書、教員研修などの学習者にとっての外的条件を整えれば、教育はよくなるだろうと考えています。そこで学校、教室、時間割、教科書などを**教育装置**と呼んでおきましょう。

ところが子どもや地域の実態などを考えて、多様な子どもが積極的に参加する授業を創ろうとすると、子どもの意欲や関心に配慮しながら、教師が主体的に構想しなければなりません。子どもも教師も自分たちの内的条件を整えて、学習する意味(なぜこれを学習するのか)を共有することが大切です。これをここでは**意味の共有**と呼んでおきましょう。

われわれが積極的に学ぶとき、いつも教える人がいるとは限りません。たとえば、陶芸家は土に学び、漁師は海に学び、農夫は自然に学んでいます。このことは土や海や自然が教えているのではなく、陶芸家や漁師や農夫が自分たちで意味を創生しながら学んでいるのです。子どもは自分の身の回りからも学ぶことが期待されており、教師もまた授業から学ぶことが求められています。このような学びをここでは**意味の創生(なすことによって学ぶ意味を実感し、さらに学びたくなる)**と呼んでおきましょう。

少子社会では、すべての子どもがその能力を最大限に発揮できることが期待されています。また、情報社会はつねに新しい知識が生まれる社会ですが、そのことは従来の職業が消滅することの多い社会でもあります。そのような社会では、失業と転職が日常化するので、すでに習得されている知識の量よりも常に学習する意欲と能力をもっていることが大切です。学ぶことの意欲と関心とともに、学ぶための基礎基本の能力が重要です。

設計においてイメージの果たす役割

画家の描く家は空想のままであってよいけれども、建築家の描く家は実現できなければなりません。授業もまた、実現できることを目指して設計されるものですが、そのためには一定の手順をたどる必要があります。

設計とは：まだこの世に実在しないものをイメージして、それを現実に存在するものとして実現していくときの手順を構想し表現することです。

設計するとき最初の出発点になるのは、イメージあるいは設計コンセプトと呼べるようなものです。われわれは授業についてどのようなイメージを描いているのでしょうか。

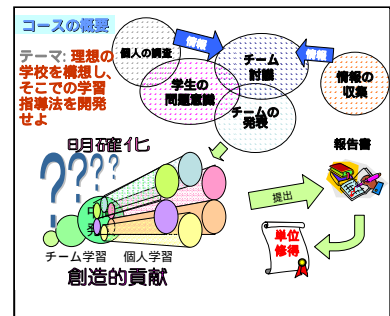
- ・子どもの実態重視か学校組織の重視か
- ・教科内容重視か学習活動重視か

03-3『『初めに学校ありき』と『初めに子どもありき』』参照

何よりも自分の能力で実現できる授業を構想すること、そして次第に高い教育目標の授業を目指して自分の力量を高めていくことが重要です。決して教育愛や子ども中心という言葉に惑わされて、自分の能力を過大に評価しないことです。もし教師が高い教育目標を掲げ、教育愛をもって授業を展開すれば立派な子どもが育つというのであれば、これほど楽な職業はありません。それはちょうど、医師が難病の患者を迎えても、立派な人間愛をもって治療にあたれば、それを治すことができると考えているのと同じです。

イメージには具象的なものと抽象的なものがあります。「授業はオーケストラのようなもの」とか、「授業は相撲のようである」というのは具象的なイメージです。具象的なイメージはスタートでは参考になりますが、修正しにくいという欠点があります。それにたいして線や図形などで表現したものは抽象的なイメージです。たとえばカリキュラムをラセン状や、ピラミッド状などで表現したものがその典型的な例です。

図形や記号を使用したものは慣れないと取り掛かりにくいですが、表現されたものを再構成することも修正することも柔軟にできます。この「教育の技術と方法」を設計するにあたって作成した図は右のようなもので、開発する過程で幾度も修正しています。



教育装置の重視から意味共有あるいは意味創生へ

少子社会では、保護者も子どもの教育にたいしてさまざまに気をくばり、投資もしているので、子ども一人ひとりを大切にしたい教育が望まれています。学習指導要領を守り、教科書に頼って授業を展開すればよいというものではなく、地域社会や子どもの実態を十分に考えながら授業を設計しなければならないのです。とくに子どもが主体的に活動しながら、なおかつ学習が進展し定着していくためには、学ぶことの意味を考えた計画が求められます。確かな学力を育てるためには確かな指導力が必要です。

現在の学校教育では、教師にとって実現できる力量以上の立派な教育目標を掲げていることがあまりにも多いのです。このような事態を避けるためには、子どもをよく観察し、記録し、分析し、解釈するという基礎的訓練が必要です。その上で子どもにとって意味のある学習活動を計画し、その活動を通じて能力が体得されていくような授業を創造することです。国際的な教育比較によるとわが国の子どもの学力は高いが学習意欲がきわめて低いのが実態ですが、これまで教育行政は教育装置の整備を重視してきましたが、その一方で授業者が意味共有や意味創生に十分配慮していない現状です。